

# 注目される「元気な温泉地」の事例発表

## 「再生プラン」策定し着実に遂行

### 北海道・阿寒湖温泉



阿寒湖温泉街

#### 沿革

阿寒湖温泉は北海道東部に位置する湖畔の温泉地。一帯は阿寒国立公園に指定され、雄阿寒岳、雌阿寒岳などの活・休火山とオンネトー、ペンケトー、パンケトーなど大小の湖、亜寒帯性の原生林が独特の景観を作り出している。

阿寒湖は火山の陥没によりできたという火口原湖で、周囲26%。特産のマリモは明治27年に発見され、昭和27年、国の天然記念物に指定された。完全球体のマリモはここ阿寒湖にしか生息しない。このほかアママス、ヒメマス、ワカサギなどの淡水魚が生息し、釣り客のターゲットとなっている。湖上を巡る遊覧船も人気。

温泉街には北海道で最大のアイヌコタン(先住民族の集落)があり、民芸品の販売や舞踊などのイベントを行っている。

温泉地はもともと周辺で林業に従事する人々が体を休める湯治場で、観光地としては鉄道駅に近い近郊の川湯温泉や弟子屈温泉が先行して発展していった。

転機となったのは飛行機の利用が一般的となった昭和40年代。首都圏、関西など大都市圏からのツアー客が増え、多くの旅館・ホテルが並ぶ一大観光地に成長した。



北海道最大のアイヌコタン

近年は同温泉の町づくり事業が国土交通省の観光リネサンス事業に選定されたほか、日中韓観光大臣会合の会場に選定されるなど、国家的プロジェクトの舞台になっている。

現在、旅館・ホテル数17軒。1日の宿泊キャパシティは約5千人。

#### 温泉

阿寒観光協会のホームページによると、「温泉の歴史は意外に古く、安政5年(1858年)北海道の名付け親である松浦武四郎がこの地を踏査したときに、既に先住のアイヌの人々が利用しており、明治45年には今の『ホテル山浦』が開業しましたが、本格的な発展は大正10年に国立公園候補地となり、昭和9年に国立公園に指定されて以後のことです」という。

泉質は単純泉、硫化水素泉で、源泉の温度は38~85度。神経痛、リュウマチや疲労回復、慢性関節炎などに効果があるといわれる。

#### 入り込み状況

阿寒町(現在は合併により釧路市)の資料によると、同町の観光客入り込み数は、昭和35(1960)年に31万7608人。以来、順調に推移し、昭和40(1965)年に50万人、昭和44(1969)年に70万人、昭和46(1971)年に80万人を突破。昭和48(1973)年は100万人の大台を突破した(107万5393人)。

平成2(1990)年は150万人を突破。その後しばらく140~150万人台で停滞したが、平成9(1997)年、前年を20%上回る180万人を記録。翌平成10(1998)年は193万7032人を記録し、観光客数はピークを迎えた。

しかし、観光客数はその後減少。平成12(2000)年に前年を13%下回る167万9521人となり、その後は150万~180万人台で推移している。直近の数字は平成17(2005)年の150万3835人。

阿寒湖温泉を含めた町内の宿泊客数は昭和37(1962)年に18万109人。その後順調に増え、昭和54(1979)年に50万人、平成元(1989)年に80万人を突破。平成10(1998)年は100万2618人と、調査開始以来初の大台を突破した。ただ、平成12(2000)年は86万5080人と、前年から13%減少。その後は80~90万人台で推移し、100万人の大台には一度も達していない。直近の平成17(2005)年は84万6318人。

観光・宿泊客数の減少は平成12年2000年の航空法改正が影響している。航空会社の路線への参入規制が廃



湖畔は歩道として整備されつつある

止、運賃が認可制から事前届出制となった。航空会社による路線の開設・撤退が容易となったため、最寄りの釧路空港に就航する定期便の総座席数が2~3割減少。同時に運賃が約2割上昇した。低価格で大量に販売するメディア系の旅行商品が一挙に減り、団体客に依存していた旅館・ホテルを中心に大きな打撃を受けた。

#### 活性化策

「阿寒湖温泉活性化戦略会議」が2000年発足した。旅館経営者や観光、町づくりの専門家などで組織するもので、2003年、活性化に向けたビジョン「阿寒湖温泉再生プラン2010」を策定した。

ビジョンでは、個人化など新しい旅行動向への対応が遅れたという反省を踏まえ、ソフト・ハード両面で構造改革を推進、計画最終年度の2010年に「2泊3日できるレイクサイドリゾート」を目指すものだ。

①阿寒湖岸の公園化②足湯・外湯の整備③温泉街の景観づくり④キャンプ場の整備⑤観光・タウン情報センター(仮)の整備⑥温泉街の交通システムの改善⑦のんびり阿寒キャンペーン⑧阿寒湖温泉IT(情報技術)推進計画⑨地域通貨と財源確保の仕組みづくり――の9項目を最重要プロジェクトに掲げた。

このほか約40の取り組みが示されている。

プロジェクトの実行部隊は「NPO法人阿寒観光協会まちづくり推進機構」。発足当初は「阿寒湖温泉まちづくり協議会」の名称だったが、機能と予算、人材の効率化を狙い2005年、町の観光協会と合併した。機構は組織基盤の強化のため法人格も取得した。

「できることから」のコンセプトで事業に取り組み、



温泉街には手湯も新たに開設

そのシンボル事業として2001年、町民による「花いっぱい運動」を推進した。

女性による組織「まりも倶楽部」も2001年発足した。観光関係者に限らず、広く町内在住の女性で組織。地元の食材を使った料理のレシピ集を作成したほか、手作りの観光地図や店のガイドブックを作成するなど活動を多方面に行っている。日中韓観光大臣会合ではメイン会場の装飾を担当。一連の活動は内外から評価され、農林水産省主催の「食のアメニティコンテスト」優良賞や、地元新聞社主催の「北のみらい奨励賞」を受賞した。

ビジョンは3年に1度見直し。成果と問題点を検証し、計画を微修正している。

ビジョンは現在進行形だが、湖岸整備など課題を一

つひとつ着実にクリアしている。明確な目標ができたことで住民のモチベーションが上がり、観光大臣会合など国家的プロジェクトの誘致にもつながったと地元の関係者はみている。

地元では、町の観光予算にとらわれず、旅館・ホテルなど民間で資金を拠出し基金を創設。観光のインフラ整備に充てる計画だ。アイヌコタンや商店街の改装に使うという。

阿寒湖の周囲26%は、温泉街の1%を除き手付かずの原生林が広がっている。そのため同温泉地は「日本一酸素濃度の高い場所」と近年評価されている。この評価を受けて同温泉では森林浴ウォークやカヌーなど新しいアウトドアメニューを作成し、観光客に向けアピールしている。

## 「弱点」を「長所」にとらえPR

### 群馬県・草津温泉



草津温泉の湯畑

#### 沿革

草津温泉は下呂(岐阜県)、有馬(兵庫県)とともに「日本三名泉」のひとつに数えられる名湯。観光経済新聞主催の「にっぽんの温泉100選」(旅行業社による温泉地の人気投票)では直近の平成18(2006)年まで4年連続1位を記録。その地位を確固たるものにしていく。

草津町のホームページによると、その成り立ちは次の通り。

「草津温泉は古くから人々に愛され、人々を癒してきた名湯。日本武尊や行基、源頼朝の開湯伝説をもち、日本最大の湯量と優れた治療効果を誇るだけに、戦国時代には多くの武将が湯治に訪れ、また江戸時代には文人、歌人をはじめ、年間1万人を超える来浴者が往来し、『草津千軒江戸構え』と詠われるほどの賑わいをみせた。徳川八代将軍吉宗も草津の湯を江戸城まで



湯もみショーを上演する「熱の湯」

運ばせて入浴したと言われ、古くから栄えた温泉町です」。

神話時代からの古い歴史を持ち、中・近世は戦国武将が傷を癒したり、庶民が疾病を治すことを目的に訪れた湯治場だった。近年は湯治場の要素に加え、温泉保養地としても発展。現在、旅館・ホテル約100軒、ペンション・民宿約50軒が建ち、1日の宿泊キャパシティは約1万2千人を数える。宿泊施設は大型旅館から小規模旅館、高層施設からリーズナブルな施設までバラエティに富んでおり、団体から個人まで幅広い客層の志向にこたえている。

#### 温泉

草津温泉旅館協同組合の資料によると、草津は自然湧出泉に恵まれており、その湯量は町全体で1日約4700万ℓと、日本一を誇る。

いくつかの源泉がある中で、最も有名な「湯畑」は毎分4千ℓを自然湧出している。泉温は53度と高温のため、自然の冷気で冷ましてから周辺の旅館や共同浴場に湯を送っている。

泉質は酸性・含硫黄 アルミニウム 硫酸塩・塩化物温泉。強酸性のため、殺菌力が極めて強い。主な効能は神経痛、筋肉痛、関節痛、皮膚病など。

温泉街には旅館・ホテルのほか、18の共同浴場があり、観光客に開放している。観光施設として、名物の湯もみショーを上演する「熱の湯」が人気。

#### 入り込み状況

草津町の資料によると、平成18(2006)年の年間入り込み客数は289万8307人。このうち宿泊客数は185万7831人、日帰り客数は104万476人。ともに前年比3%程度減少している。

昭和45(1970)年に167万人だった入り込み客は、翌46(1971)年に229万人と、200万人を突破。以来、

昭和58(1983)年(196万人)を除き、常に200万人以上の数を維持している。平成6(1994)年は307万人と、初めて300万の大台を突破した。平成17(2005)年は2回目の300万人突破(300万1629人)。

入り込み数はここ10年来、300万人弱と、大きな波もなく、安定して推移している。

ただ、町のスキー場の入り込み客数はピーク時の約90万人から約30万人と3分の1に減っている。実数で60万人の減少。しかし、町全体の観光入り込み客数はピークの年とほぼ変わらない。スキー客の落ち込みを温泉入浴客がカバーしている、と、地元の観光協会がみている。

#### 活性化策

平成9(1997)年から3カ年をかけ、「草津温泉ブラッシュアップ計画」を策定した。

町、観光協会、旅館協同組合、商工会に加え、大手旅行会社の協定旅館連盟の支部・地区会、旅館女将の会「湯の華会」をメンバーに「草津温泉ブラッシュアップ計画協議会」を組織。財団法人日本交通公社が協力し、温泉地を磨き上げるための行動計画を策定した。

目指すべき目標像は、1年次に「もう1泊したくなる草津温泉」、2年次に「国際的な温泉・高原リゾート草津温泉」。最終的な目標像に「古さと新しさを兼ね備えた新湯治場」。

重要プロジェクトとして①全員セールスマン活動②個人看板の撤去と統一標識整備③駐車場・シャトルバス、歩行者空間整備など交通計画④あいさつ運動・朝のお掃除運動⑤農家を交えた料理研究会⑥住民各種活動との連携 ボランティアガイド⑦住民各種活動との連携 練習風景(噴火太鼓、草津節の踊りなど)の見学化⑧温泉資源見直しと新温泉文化創造 泉質見直し研究、入浴法の継承システム、祭りや町内各施設の由来研究など⑨新国際交流 人的交流から産物交流へ――を掲げた。

例えば、全員セールスマン活動は、「町役場の職員、観光協会、旅館組合の会員等、観光に携わる一人一人、また町民全員が『草津のセールスマン』という意識を持ち、草津町の外に出るあらゆる機会をとらえて、草津温泉の観光パンフレットやイベントパンフレット等

# 全旅連21世紀型温泉地問題委 調査レポート

全旅連厚生部会(大木正治部会長)の21世紀型温泉地問題委員会(斎藤宗武委員長)は06年度事業として、「今、注目を浴びている元気な温泉地」の調査を観光経済新聞と共同で実施した。そのレポートを紹介する。

を国、県等の機関や旅行エージェンツ、JR等の観光関連業者に持参することを徹底することが重要である」としている。

また「トップセールスも重要であり、町長、観光協会会長、旅館組合長はそれぞれの機関(国、県等上位機関の先機関、業界団体、運輸機関、旅行エージェンツ等)の長とのコミュニケーションを普段から密にとり、イベントなどへ彼ら自身を誘客することも求められる」としている。

草津温泉のトップセールスは徹底しており、平成12(2000)年から毎年、町長をはじめ、議会、業界など町のトップが東京の旅行業者や報道関係者を訪問、誘客を訴えている。またインバウンドも視野に入れ、中国、シンガポール、オーストラリアなど海外へ毎年宣伝隊を派遣している。

ブラッシュアップ計画協議会で重要な位置を占める女将会「湯の華会」は、「おかみさんおすすめのお散歩マップ」を作成した。会のメンバー自身が町を歩き、魅力を感じた点を一言コメントとして掲載している。

マップでは、坂道や狭い道が多い草津温泉の弱点を長所としてとらえ、「曲がりくねった道の狭さが浴衣がけでぶらぶら歩くのにちょうどいい」と訴えている。

草津温泉は近年、「泉質主義」をキャッチフレーズに掲げ、宣伝に広く活用している。同温泉の代名詞ともなったこのフレーズは、スキー客が減少する中で、冬季の誘客対策、イメージアップ戦略の一環として平

成13(2001)年12月に発表した。「強力な殺菌力を誇り、自然湧出量日本一を誇る温泉を源泉かけ流しで使う」というアピールは多くの温泉ファンにインパクトを与え、温泉地のブランド向上につながることとなった。



狭いが趣のある温泉街の道路

ものの意)にちなみ、「ダイジンガー・プロジェクト」と名付けた。正式名称は「住民参加型地域振興のためのユビキタスフィールドナビゲーションシステム」。総務省の「戦略的情報通信研究開発推進制度」による補助金を得て、平成20(2008)年の完成を目指して、現在システムの構築に取り組んでいる。

「松之山は“だいじんがー”だらけということに地域の方々に気付いてもらい、それを世界へ自慢してもらうための情報発信システム」との位置付けだ。

町のタイムリーな情報を町民から集約し、ネットで発信する。ネット上に松之山の地図を作成。地図上の一部をポイントすれば、「今、ここでカブトムシが1匹見つかった」「アカショウビン(鳥)が鳴いた」など、リアルな地域情報を見られるものだ。松之山温泉

のポータルサイトとしての機能が期待されている。

松之山を象徴する棚田を存続させようと、温泉組合の有志が田植え、稲刈りにも取り組んでいる。後継者不足や高齢で、手間のかかる棚田の耕作を放棄する農家が少なくないという。荒廃した棚田は亀裂が生じた部分から雨水が入り込み、地滑りを誘発するという危険もはらんでいる。

組合では環境保全と、重要な観光資源でもある棚田を後世に残そうと、同事業に取り組んだ。作業はイベント性をもたせ、温泉旅館の宿泊客の参加も募っている。組合員と観光客の手で作られた棚田コシヒカリは、旅館の食膳に実際に出される。農作業の合間には採れたての山菜やきのこを使った料理が振る舞われる。青空の下で食べるまかない料理は好評を博している。

## 「オンパク」が街の活性化に貢献

### 大分県・別府温泉

以前は修学旅行者が多く、昭和38(1963)年は観光客693万人のうち102万人を修学旅行者が占めた。修学旅行者は昭和45(1970)年まで年間100万人を超えたが、その後大きく減少し、平成17(2005)年は4万5千人まで減っている。

日帰りを含めた観光客数は平成3(1991)年の1248万人から、2年後の平成5(1993)年に1083万人に激減。しかしその後盛り返し、多少の波はありながらも再び上昇傾向が続いている。

#### 活性化策

別府八湯温泉泊覧会「ハットウ・オンパク」が、誘客と町の活性化に実績を挙げている。

NPO法人ハットウ・オンパクが主催。平成13(2001)年10月に第1回を開き、以来、年2回のペースで続いている。

町歩きや温泉巡り、料理体験、ビューティーセミナー、社交ダンス講座など、町にある素材を生かした、



海沿いに広がる別府温泉街

#### 沿革

別府温泉は別府、浜脇、観海寺、堀田、明礬(みょうばん)、鉄輪(かんなわ)、柴石、亀川という、別府市を代表する8つの温泉地の総称。通称「別府八湯」と呼ばれる。各温泉地は市内に点在し、成り立ちや雰囲気もそれぞれ異なる。

主な温泉地の特色は次の通り(別府市のウェブサイトから)。

別府温泉「伊予国風土記に『遠見の湯』として記されているが、本格的に脚光を浴びはじめたのは江戸時代である。明治に入ると別府湾の築港、日豊本線や別大電車の開通、また掘削技術の導入等で源泉数、温泉施設・温泉宿とも増加した。さらに大正・昭和と温泉施設も充実、次第に市街地が拡大されて別府八湯の中心となる」。

観海寺温泉「温泉場としては鎌倉時代に発見され、海拔150㍍、別府八湯のうちでも一番見晴らしがよい。昭和6年の大火後、復興し、観光温泉場として急速に発展。現在では別府を代表する大型リゾートホテルが立地する」。

鉄輪温泉「鎌倉時代『玖倍湯の井』といわれた荒地獄を一遍上人が開発。その一遍上人創設の『むし湯』付近が鉄輪の中心地で、狭い道の両側には、多くの共同浴場、旅館、土産品店がひしめいている」。

宿泊施設数は全体で278軒(平成17年12月現在)。このうち旅館・ホテル205軒、民宿8軒、公共宿泊施設7軒、その他58軒。1日の宿泊キャパシティは約2万人。

#### 温泉

源泉数と湧出量は日本一を誇る。環境省資料(平成



レトロな雰囲気竹瓦温泉

15年)によると、源泉数は2838あり、2位の湯布院(838)を抑えてトップ。湧出量は1日13万7208㍍㍈で、これも2位の湯布院(6万1607㍍㍈)を抑えてトップに立っている。

泉質は11の泉質分類のうち、放射能を除く10種類が確認されている。

八湯には旅館・ホテルのほか、バラエティに富んだ公衆浴場が整備されている。別府温泉のシンボリック存在の竹瓦温泉は、レトロな雰囲気が観光客の人気を集めている。

#### 入り込み状況

別府市の統計によると、平成17(2005)年の宿泊客数は392万5190人。前年を約4千人上回った。日帰り客を含めた観光客全体は1173万5741人で、前年比約17万人の増加。

宿泊客数は昭和38(1963)年、144万人に過ぎなかったが、昭和41(1966)年に200万人、昭和43(1968)年に300万人、昭和45(1970)年に400万人を突破。昭和46(1971)年は500万人の大会を突破した。ピークは昭和51(1976)年の613万1523人。

宿泊客数はその後漸減。バブル期に一時盛り返し、昭和61(1986)年から3年連続で前年を上回ったが、再び減少。しかし、ここ10年間は年間400万人前後で落ち着き、大きなブレはみられない。

## 地域の魅力を発掘し内外へ発信

### 新潟県・松之山温泉

を一気に上昇し、湧出している」という。

#### 入り込み状況

年間観光客数は昭和45(1970)年に7万6千人に過ぎなかったものが、10年後の昭和55(1980)年に10万8100人、バブル期ピークの平成2(1990)年に19万8千人と、10年でおよそ倍の数字を記録した。

この数字はさらに増え、バブル崩壊後の平成7(1995)年は30万2千人。平成15(2003)年は37万6490人と、入り込みの最盛期を迎えた。ただ、平成16(2004)年は新潟県中越地震、平成17(2005)年は豪雪とたて続けに自然災害に見舞われ、観光客数はそれぞれ前年の9割程度にとどまっている。

昭和58(1983)年に町営スキー場がオープン。豪雪地帯という地勢から、「夏履いた分を冬食いつぶす」と言われてきたが、通年観光地として大きな飛躍を遂げた。スキー場のオープンに合わせて周辺道路も整備され、冬季の道路事情が格段によくなったことも入り込み増に拍車をかけた。

ただ、90年代後半から同地を訪れるスキー客は激減。平成7(1995)年に5万人を記録したスキー客は3年後の平成10(1998)年に2万6千人、平成17(2005)年には1万9千人まで落ち込んだ。

スキー客回復の兆しは見られないが、それでも温泉地全体への入り込みは比較的安定して推移している。雪見風呂の魅力発信など、スキー客に依存しない冬季



ユニークな案内板は「大地の芸術祭」で芸術家が作成

の誘客態勢が整備されてきている。

#### 活性化策

平成13(2001)、平成14(2002)年にフィルム会社の協賛による写真展を開催した。町の風景を題材にした写真作品を一般から募集。素朴な里山の風景を被写体にした多くの作品が寄せられた。これら作品は写真雑誌などに掲載され、多くの写真愛好家の目に止まることとなった。以来、多くのアマチュアカメラマンが日本の原風景を求めて、同地を訪れている。

3年に1度行われる「大地の芸術祭」も温泉地の活性化に一役買っている。世界の芸術家が松之山を含む越後妻有地域に集結。越後の大地を舞台に、様々なアート作品を制作・展示している。前回は平成18(2006)年に開催した。

一連のイベントは、町の外に住む人々が、松之山の住民に対して、地元の魅力再認識させるといった効果を生んでいる。イベントを機会に、地域にある魅力を



「森の学校キョロロ」

発掘し、地域外に発信しようという機運が町の中に生まれた。

その一環で現在取り組んでいるのは、地域資源のデータベース化。当地の方言「だいじんがー」(大事な



松之山温泉街

#### 沿革

松之山温泉は新潟県中越地方に位置する山間の温泉地。東京からのアクセスは上越新幹線越後湯沢駅からほくほく線に乗り換え1時間弱、まっただい駅で下車し、ここからさらに車で約20分の道のりとなる。

長野県との県境に近く、日本を代表する豪雪地帯で知られる。山の傾斜を利用して作られた棚田は同地域の代表的な風景。近年は日本を代表する里山風景として写真撮影の格好のスポットとなっている。

付近にはこのほか、美人林と呼ばれる樹齢80年のブナの原生林が広がり、森林浴や自然学習の場として、広く一般に開放されている。これら松之山の自然と、自然の中に生息する動物、雪国で生きる人々の文化を調査・研究する科学館「森の学校キョロロ」は松之山を代表するスポットとなっている。

温泉は、「今から700年以上前の南北朝時代、一羽の鷹が舞い降りて傷ついた羽を休めているのを木こりが見つけた。そこにこんこんと湧く熱泉を発見した」との伝説が残っている。「室町時代、越後守護上杉家の隠し湯であった」との言い伝えもある。

温泉地は現在、17軒の宿泊施設で構成する。このうち温泉組合加盟が12軒で、ほかは民宿や公営宿泊施設など。17軒で192室を持ち、1日の宿泊キャパシティは927人。

#### 温泉

効能は草津(群馬県)、有馬(兵庫県)と並び、「日本三大薬湯」のひとつといわれている。同温泉を代表する源泉・鷹の湯は、ナトリウム・カルシウム 塩化物温泉で、泉温92度。無色透明だが、塩分が強く、なめると塩辛い。適応症は切り傷、火傷、慢性皮膚病、



湯煙を上げる源泉

冷え性、疲労回復、健康増進など。

塩化ナトリウムの成分が多く、かつ、ほう酸の含有量も非常に多い。これら成分が傷口を乾かし、殺菌することが、薬効が高いといわれる要因とみられる。また塩化ナトリウムには汗腺をふさぐ効果があり、そのため温泉による熱が体の中へ中へと移動し、冬でも湯冷めしないという効果につながっている。

近くに火山がないのに高温の温泉が自噴したり、山の中の温泉なのに塩辛いなど、古来、松之山温泉は謎の多い温泉とされてきた。観光協会によると、「松之山温泉の起源は隆起運動によって閉じ込められた海水と考えられる。それが地殻の熱伝導で温められ、断層



観海寺温泉

「温泉」「まち」「自然」「食」「健康と美」をキーワードにした小規模イベント・教室・ガイドツアーを、2-3週間の期間中、約200件開催している。

10年ほど前から増えてきた有志による町おこしイベントを集約。総合的にプロデュースした。

最も受けているイベントのひとつが、路地裏の散策ツアー。別府には戦争の被害を受けていない一角が今でも残っており、この古い町並みをボランティアガイドの案内で散策する。特に竹瓦温泉界隈の路地裏散策は人気の定番コースとなっている。

オンパクの参加者数(イベント開催施設利用者数)は、直近(平成18年秋)は約4千人。うち女性が94%と圧倒的に多い。参加者の居住地は別府・大分で8割を占め、リピーターが多いのが特徴。

オンパクは観光・宿泊客の誘致とともに、地元サービス産業の振興も視野に入れている。イベントを通じてサービスの人材育成を図るほか、イベントのインストラクターとして訪れた人材を別府に定着させ、地元のサービス産業全体をレベルアップさせる効果も狙っている。

オンパクが現在目指しているのは、オンパク型事業の全国展開。「オンパクの取り組みにおける経験や開発したITシステムを活用して、他の地域における同様の取り組みに対して積極的にサポートもしていき、地域それぞれの特性を活かした地産地消、地場産業育成の健康・集客・交流サービス産業の創出のお役に立ちたい(NPO法人ハットウ・オンパク)からだ。

その第1弾として平成18(2006)年、北海道湯の川温泉が湯の川版オンパクの開催を始めた。2千人を超す参加者を集め、平成19(2007)年3-4月に行った2回目のオンパクでは、3202人と前年を越す参加者を集めるなど実績を挙げている。

オンパクの全国展開は、別府のマーケティング戦略の一環でもある。オンパクのイベント参加者は、希望者のみに限定されるが、「オンパクファンクラブ会員」として主催者のデータベースに登録される。この顧客データは次のイベント開催に向けて、DMなどに活用される。

現在、別府では約4300人の顧客リストを持っているが、このうち県外客は約2割にとどまっている。宿泊需要の開拓には、県外客のさらなる誘致が必要。別府では、オンパクの全国展開により、全国各地のオンパクに参加した客に次のイベント情報を発信、全国からの誘客につなげたいと考えた。別府では、オンパクの運営・集客を支援するITシステム(AS Pシステム=インターネットを活用した情報処理サービスのアウトソーシング)を構築しており、同システムを他地区に提供することで、他地区におけるオンパクの運営、集客をサポートする。



「オンパク」の路地裏散策